

養 蚕 法

復刊版



群馬地域文化振興会

高山社長町田菊次郎著

六版

養蠶法 全

高山社同窓會藏版

曲禮

禮記卷之四
曲禮

信

毅
仁
書



明治二十二年五月の月
彰仁親王殿下高山社
成らせり建てる随ひす
りてもあら

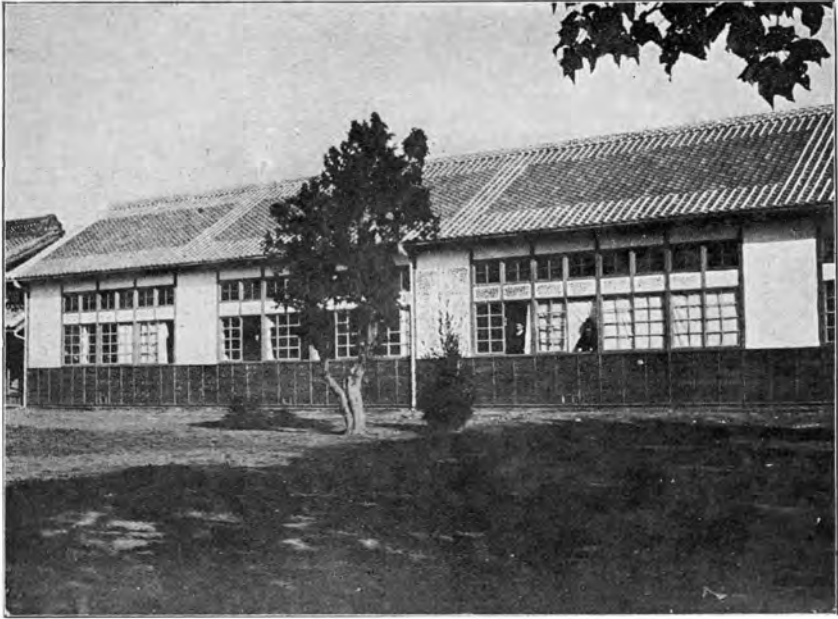
五位勲五等若原殿

高山の名も

跡を
ありぬ

雲のたづね

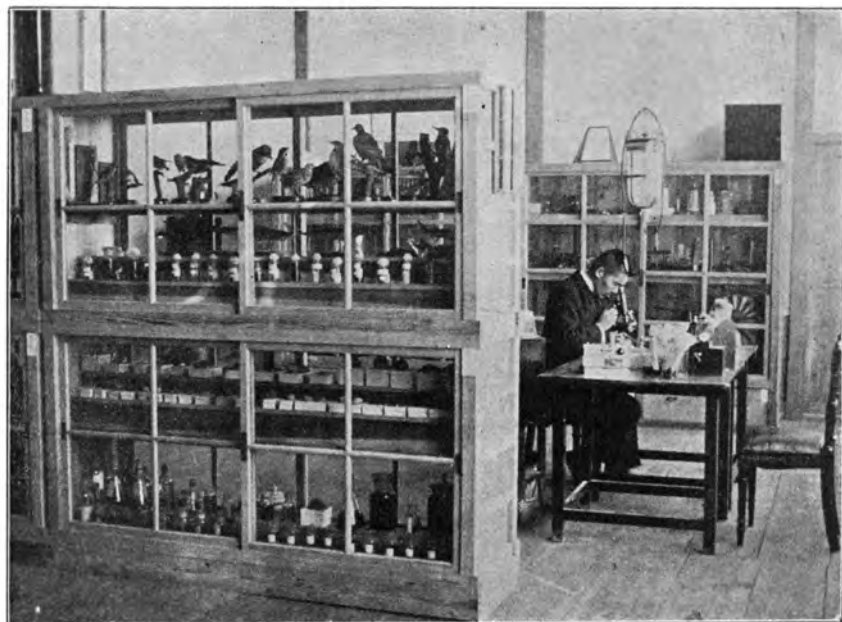
けい
い
あ
は



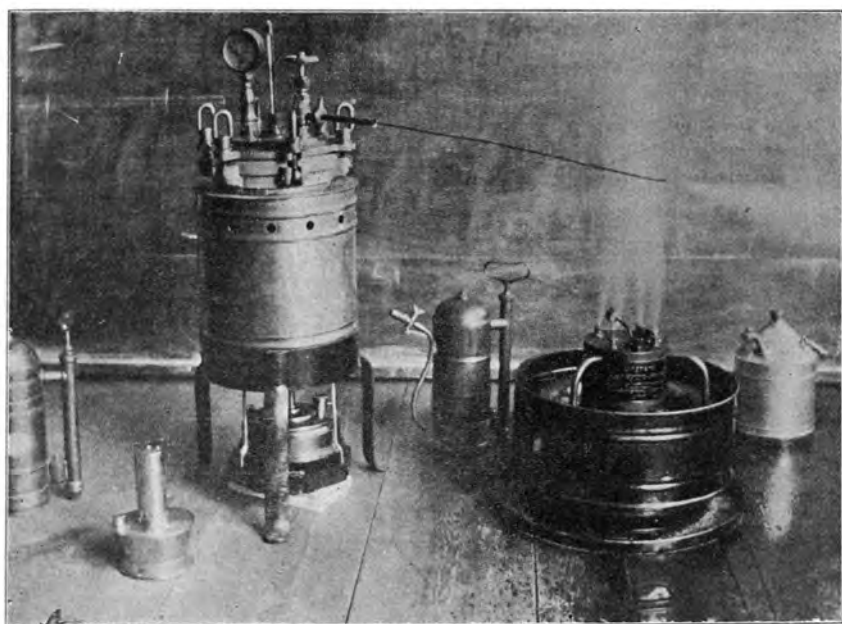
學 校 教 師 室 一 部 分



黨 室 前 面 一 部 分



實 驗 室 の 内 景



殺 菌 消 毒 器 の 圖

緒言

我社は創業以來日なほ淺く未だ素志を貫徹するの運に至らずと雖も然も今や社員は全國に亘りて三萬人に垂んとし。而して我清溫育は遍ねく四邊に傳はれり是また時勢の然らしむる所なる歟。第五回内國勸業博覽會が名譽ある金賞牌を我社に賜はるに至りし所以のものは固より多大の恩典たるべしと雖も亦微力を蠶業社會に效したる報賞たらずんはあらず。之れ眞に我社の光榮とする處なり。爾來良友余に勸むるに蠶書を著すを以てするも余は學識缺しく經驗淺きを以て屢々逡巡躊躇せり。然るに近來社員の之を督迫する彌々切なるに至り遂に筐底の私稿を繕きて校員に蒐集せしむ。即ち第一章は男三郎にして第二章より五章に至る四章は小林薰治君之を分擔し。其他の各章は

三俣愛策君に仍て成れり。蓋し在甲種高山社蠶業學校々員は職務の多忙なるにも拘らず。僅々數週の短日時に於て篇を成に至りたる勤勞は實に尠少に非ず之れ余が深く謝する所なり。然り而して由來蠶業は其關係複雑にして且極めて緻密なり其要趣は素より筆舌の盡し得ざる所多し。況や其蘊奥の如きは到底記述する能はざるを如何せん爾已ならず篇中意を得ざるもの寡しとせず。今や匆忙出版するに際し顧慮する所なき能はざるも他日大いに補正を加へ大成を期せんとす。唯だ本書を公にせるは當業者の参考に供し聊か蠶業上の便宜を得せしめんとするの微衷に過ぎるなり。若し採て用ひらるゝ所あらば幸甚也矣。

明治三十七年三月中院

著者識

養蠶法目次

緒論

第一篇 五廣論

第一章 桑樹栽培

- 五廣要義……………三一
- 種類……………三三
- 育苗……………三八
- 栽植……………四三
- 培養……………六一
- 桑園改良法……………六七
- 育苗……………七七

第二章 蠶種

○ 植付……………八一

○ 採桑……………八六

○ 培養……………八八

○ 蠶種の種類……………九七

○ 又昔の奨励……………一〇〇

○ 蠶種の撰擇……………一〇一

第三章 蠶室

○ 蠶室の概説……………一〇五

○ 蠶室の設計……………一〇五

○ 陰室……………一一三

○ 冷室……………一一四

第二篇 養蠶汎論

○	陽室	一一五
○	蠶室の要素	一一九
第四章 蠶具		
○	蠶具の解説	一二一
○	蠶具	一二一
○	附屬品	一二九
○	蠶具の數量	一三五
第五章 人夫		
○	養蠶の費用	一三九
○	採桑の節約	一四三
○	飼育の節約	一四三

第六章 蠶種取扱

○ 護種の目的……………一四九

○ 一 期……………一四九

○ 二 期……………一五五

○ 三 期……………一五九

○ 催青の手順……………一六二

第七章 飼育の要旨

○ 蠶業の趨勢……………一六九

○ 判桑の注意……………一七三

○ 給桑の注意……………一七七

○ 火力の注意……………一八一

○ 除沙の注意……………一八五

第八章

- 分箔の注意……………一八五
- 絲繭飼育法……………一八六

採桑法

- 採桑の概要……………一九一
- 採桑の方法……………一九二
- 採桑の順序……………一九四
- 採桑の時期……………一九九

第九章

貯桑法

- 貯桑の目的……………二〇七
- 器具の装置……………二〇八
- 貯桑の取扱……………二〇九
- 桑場の設備……………二一一

第十章 空氣利用

- 換氣の大意……………二一七
- 隼沙の適度……………二一九
- 空氣の感應……………二二一
- 乾冷の場合……………二二五
- 溫暖の場合……………二二七
- 濕潤の場合……………二二九
- 濕暖の場合……………二三一
- 換氣の概要……………二三七

第三篇 蠶兒飼育論

第十一章 蠶兒掃下

- 掃下の大意……………二四一

第十三章 二齡飼育

- 第一の要旨……………二四二
 - 第二の要旨……………二四三
 - 第三の要旨……………二四三
 - 蠶種紙包法……………二四四
 - 掃下の桑質……………二四六
 - 掃下の手順……………二五〇
- 第十二章 一齡飼育**
- 一齡概要……………二五五
 - 飼育標準……………二五八
 - 飼育實蹟……………二六〇
 - 飼育要點……………二六九

○ 二齡概要……………二七九

○ 飼育標準……………二八一

○ 飼育實蹟……………二八二

○ 蠶牀の變相……………二九〇

第十四章 三齡飼育

○ 三齡概要……………二九三

○ 飼育標準……………二九五

○ 飼育實蹟……………二九六

○ 飼育要點……………三〇二

第十五章 四齡飼育

○ 四齡概要……………三〇九

○ 飼育標準……………三一

○	飼育實蹟	三一二
○	飼育要點	三一九
第十六章 五齡飼育		
○	五齡概要	三二三
○	飼育標準	三三二
○	飼育實蹟	三三三
第十七章 上簇法		
○	上簇の概要	三四五
○	溫度の快適	三四七
○	空氣の清淨	三四七
○	乾濕の調和	三四八
○	簇材の撰擇	四八三

第四篇 蠶業續論

第十八章 蠶蛹及貯繭

- 簇の製作法……………三四九
- 簇の附屬品……………三五一
- 上簇の器具……………三五四
- 熟蠶の取扱……………三五五
- 簇の使用法……………三五七
- 上簇の注意……………三五八
- 蠶鉢の變化……………三六三
- 上簇の効果……………三六七
- 乾繭の大要……………三七一

第十九章 蠶種製造

○	輕便殺蛹器	三七三
○	器械の使用	三七九
○	一番掛	三八一
○	二番掛	三八三
○	貯繭	三八四
○	採種の方針	三八七
○	三撰の必要	三九四
○	蠶兒の撰擇	三九五
○	蠶繭の撰擇	三九七
○	蠶蛾の撰擇	三九九
○	原繭の保護	四〇二

○ 採種法	四〇四
○ 蠶種の装置	四〇六
○ 採種の要點	四〇七
結論	四一七

養蠶法目次終

養蠶法

高山社長 町田菊次郎著

緒論

本邦は古來
絹絲國あり

本業の擴張

海外貿易は
斯業を誘發す

我邦蠶業の起源は遠く往古に屬し其詳かなるを知るを得ずと雖も。本業の創始してより以來絹絲は幸に貢獻の資料となりて。各朝に傳はり一進一退ありしも以て今日あるに至れり。其絹絲國の稱あるは決して偶然にあらざるなり。回顧すれば今より五六十年以前に於て斯業大いに開け追年擴張の運に向ひ産繭も増加せんとする趨勢を示せり。是れ海外貿易の途開け需用は年毎に多きを加へ。從て供給すれば從て輸出し其利益の多くして他の農産物を超ゆるもの

表面の進歩
却て失顧に
陥る

あればなり。此氣運は延て養蠶の擴張、製種の増出、生絲濫造、となり東西競て其緒に着き、蠶絲業の新天地を開興せり。その隆盛なる驚歎すべきものあり。然れ共飄て其實相を窺ふ時は當時未だ人智進まず經驗寡なく啻利之計り。急奔頓走家産を擲て斯業に就き大資本を投じて蠶業に傾けしかば職として未だ得所なく幾多失敗に終るもの往々あり。其極財産を蕩盡するが如き、不幸の深淵に陥るもの寡なからざるに至れり。之他なし徒らに皮想に走り實業の研究未だ足らざるの致す所なり。當時の狀勢は斯の如く夫れ然かり其危殆言ふべからざるものあり。

高山組の出
生

高山社長故高山長五郎は此前轍に顧みる所あり。此時に於て斯業に經驗を重ね幾多失敗の後遂に一種の育法を發明

清温育の發表

著々改良の實揚る

高山社の沿革概要

高山長五郎の生立

幼にして蠶業に就く

し。眊勉研究して完全なる飼育を確定し稱けて清温育となし。爾後今日に至るまで始終一貫この方法を實行し専ら養蠶の改良に従事し。始め親族より起り一郷一郡に及び一國一縣而して本邦全土の育法を改良するに至れり。其年々歳々社員の増加する勢は恰も水の卑に就くの觀なき能はず。是を既往に徴し將來を推ときは尙幾層の盛大を致すべきかは豫め期せざる所とす。今爰に我社沿革の概略を掲載するは決して無用にあらざるを信ず。

故社長高山長五郎は本郡美九里村大字高山の産にして家世々農事を業とし里正を勤む。氏十八歳にして家督を繼ぎ幼少より養蠶を好み自から其勞に服し愛育慈養に力を致すと雖も。其年の氣候により豊凶一定ならず之を憂ふるこ

種々なる方
面より研究
す

古老の門に
往復す

野蠶の狀態
に因て悟所
あり創めて
育法を確定
せり

野蠶術

と久かりしが。文久元年決然養法の研究に従事し或は古書に測り或は實地の經驗に照らし養蠶期節に至れば數日間衣帶を解かず寢食を忘るゝに至る。而して飼育の間苟も寸暇あれば近隣の養蠶家に遊び飼育の實況を視察し其刻苦到らざるなし。適々野蠶の桑樹に休眠せるを見て大に悟る所あり之に由て益々勵精工夫を凝らし爾來明治元年に至るまで八年間の經驗を積み難易を考ひ得失を測り清暖を調和折衷して一種の飼育法を發明す。是乃ち我社の蠶兒扱法にして野蠶術と唱へ其意義は蠶兒充分飽食したる後裸體にて就眠するにあるなり。之を清溫育と稱し其養法を實施するや頗る蠶兒の健康に適し成繭巨大にして形狀能く整ひ光澤の美亦之に適ふ。同二年同一の養蠶を行ひしに果